



極楽通信編集部

# HERBUD

# 極楽通信

極楽通信  
ウブド

Vol.17

U・B・U・D



I・N・D・A・H



photo:Y.Hori

バリの人はかなりおしゃれである。普段はいいかげんな格好をしていても「TPO」はきちっとしていて、様々な儀式や儀礼の時には手を抜かないでおしゃれする。それも若い女性はもとより、子供から老人まで男女関係なくおしゃれである。身に纏う服の生地、仕立てと着こなし、アクセサリ、それにお供え物まですべてに気遣いが感じられ、しかもそれが格好よく決まっている確率が日本のおしゃれに比べても明らかに高いと思う。日本で言う「粋」という感覚に近いものを感じることもある。

生活様式やワードローブの多様さが日本とは比較にならないほど単純だけど、だからこそ工夫とセンスが光るとも言える。

そういえば、日本でも「着物」を常用していた時代にはそんな感じがあったような気がするのは私だけであろうか。

堀 祐一

# Contents

● Kabar Baru Berita Lama	
Musim Hujan (雨季)-----	4
Big Baby-----	6
グリーン・イグアナ-----	7
バリ・ジャムーの話-----	8
● Bagaimana Caranya?-6-	
「ティエツ！」と「ショツ」-----	9
● Kebyar Legong	
バリの舞踏／クビヤールレゴン-----	10
● BALI/Hutan Sederhana	
原生林を訪ねて-----	12
● Lancong Lancong Bali/4	
ランチョンランチョンバリ／4-----	14
● C・O・L・U・M・N	
ワイロ／SOGOK-----	20
● Dari Jepang	
UBUD 病患者 M のうわごと-----	21
● Toko BEST 店	
KOMANEKA-----	22
RUMAH Seni-----	22
● Apa Itu?	
これなあ〜んだ?-----	23
● Hari Raya '97-	
1997 年の祭日のおしらせ-----	23
● Berita Terbaru	
その他のニュース-----	24
● Orang-orang Ubud/17	
うぶんな人々／17-----	25
● Pengumuman	
でんごんぼん-----	26

## ○表紙のことば○

堀田 剛一

エッフェル塔は  
どこにあんのや〜?!  
それは  
パリや!

## 編集室便り

### ●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

Macintosh フォーマットの FD (Text Data)

Dos フォーマット (2DD-720KB) の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。



## Musim Hujan (雨季)

七度目の雨季に立ち合っているのだが、いまだにどんな状況で雨季に入るのかまったくわからない。そのパターンがつかめないまま、今年も雨季に突入してしまったようだ。乾季にもスコールはあり、二、三日降り続く雨もある。この雨で雨季に入ったのかと思っていると、晴れ間が続き、どうもまだ雨季ではないようだ。降り続く雨にバリ人は「もう雨季だ」といいきってしまうが、何の根拠もない。この乾季と雨季のあいまいさがどうも雨季の到来をわからないものになっているようだ。雨季に突入してきてから、あの雨からがどうも雨季だったのではないかと気付くもののである。乾季も同様、いつのまにか乾季になっている。バリにはこの雨季と乾季の二つの季節しかない。雨季のよさは緑が瑞々しく、花々は色鮮やかで美しく、そして、美味しい果物が豊富になる。

シンガポールやマレーシア方面の雨季が終わり、大陸からの風がオーストラリアからの風になるとバリは雨季に入る。バリの雨季はオーストラリアからの風によって運ばれてくる。UBUDの雨は南からの風をともなってくるというわけだ。磯釣りファンの友人A氏によるとバリ南部海岸での磯釣りは乾季は不向きで、海側からの風が吹く雨季がよいのではないかと聞いていましたが、真偽のほどは本人もまだ試していないのでわからないようです。

今年は十月下旬に雷をともなった大雨が三、四日続きました。どうもこれが雨季の本格的到来であったように思います。その大雨でブンゴセカン村にあるタイ料理レストラン「ココカン・クラブ」は、近くに流れている川が普段の水位より3mほど増水し、床上70cmの浸水で、イスが流れ、ティンクレック(竹の楽器)が流失してしまったそうです。近くのウッドカーピングの店では、輸出予定のコンテナ一台分の商品が全滅してしまい倒産しそうだという噂。写真は、川のマンディー場が激流に洗われ溪谷のようになってしまったものです。

増水はもちろん大雨が大きな原因ではあることが確かですが、もう一つ原因があります。それは、バリの



急速な発展によるものです。道路がアスファルトで舗装され、測溝が整備されると、雨水は地下に浸透されないまま道路から測溝へ、測溝から川へと一気に流れ込みます。それが、増水という結果をもたらすのです。今後、道路や住宅の下水の整備が進むにつれ、川の深さや幅が問題になってきます。そして、地崩れの心配から護岸整備の問題もでてくるでしょう。いまのうちに下水、川の問題を解決していく必要がありますね。

道路の水が溢れたり、流木が道を塞いだりという、バリの雨季の風物詩がなくなってしまうのは残念ではありますが、住みよい環境をつくることもまた大切なことだと思います。



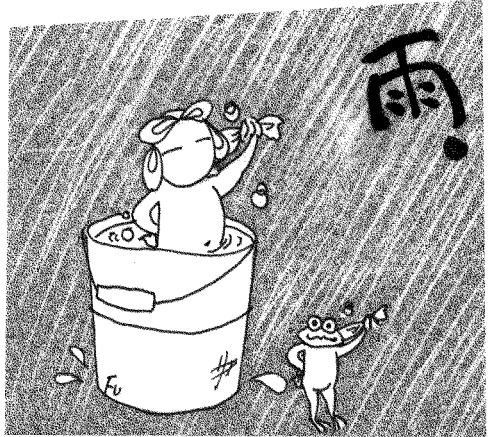
## ●エナちゃんから「雨季のたより」

上記本文を書いた極通スタッフI氏は、「乾季と雨季の変わり目がわからん!!」と言うことですが、エナちゃんはずい最近、お義母さんからおもしろい話を聞いたので、みなさんにもご紹介しましょう。

最近ちょっとムシ暑くなってきたな、と思っていたら、お義母さんがこう言いました。「そろそろサシアンの変り目だからね」。サシー（サシアン）とは、バリ・カレンダーのサコ暦の月（Month）のこと。ちなみに、ちょっとめんどくさい話になりますが、今年のサシアンは7月17日から第1の月が始まりました。月の出ない新月の次の日がサシアンの変り目で、ほぼ30日の周期で第12の月まであります。毎年、第10の月（Sasih Kedasa）の初日－今年は3月21日でした－がニュビにあたります。バリの人々は西暦の何月ではなく、「Sasih Kelima（第5の月）は暑い」とか、「Sasih Kewulu（第8の月）は強い風が吹く」とか、よく言います。

・・・でお義母さんの言ったのは、10月の中旬、Sasih Ketiga（第3の月）とSasih Kapat（第4の月）のちょうど変わり目の頃、のことだったのです。そう、このSasih 第3月と第4月くらいが雨季の始まりとも言えるのです。

そりゃあ毎年、カレンダーのと通りに雨季がやってくるわけではありません。そこで、暦を見る以外の方法で雨季を知る方法がもう一つあります。それは、マンゴーとハエとドゥダ（かげろう）ときのこ。



1. マンゴーの木に、まるまると太った実が甘く熟し始める。
2. 「なんだか最近、ハエが多くなってきたな」と思う。いつもハエの多いバリだが、特に多くなる。
3. 夕暮れ時が終わり、夜のとばりが降り始める頃、電気にわんわんとドゥダがむらがっているのを見る。
4. 大きな木の根元や、湿った場所にきのこが生えているのを見かける。

この4つが雨季の到来のめやすです。

ちなみに、エナちゃんのいるバトゥプランでは、1～3がすでに済み。乾季と雨季の変り目から、昼夜の別なく気温の上がり下がり激しくなり、特に夜はじっとり寒いような、暑いようなヘンな空気が体にまとわりついて気持ち悪くなってきます。そうなるバリの人々は、カゼをひいたりして体調をくずしてしまい、医者待合室は順番待ちの患者でいっぱいになります。暑さのため、ここんとこずーっと食欲のなかったお義母さんも、胃をこわしてふせてしまいました。「昔は、あちこちにおいしいきのこがたくさん生えたものだったけど、どうしてかしらねえ、最近あんまり見かけないわねえ」。医者からもらってきた薬をバナナといっしょに口の中に押し込みながら、きのこの種類とその料理法、そして、それがどんなにおいしいかを熱心に語ってくれたお義母さん、早くよくなってね。・・・と家の裏庭で実った、はちみつのように甘くておいしいマンゴーをほおばりながら書いているエナちゃんでした。



## ビッグ・ベイビー

ちょうどマス村とパトゥアン村の間、サカ村の三叉路に大きな石の彫刻があるのを、UBUDを一度は訪れたことのある人は覚えていることでしょう。座っている赤ちゃんの大きな石像。今では、車の排気ガスとコケで真っ黒になってしまいましたが、完成当時はきれいな色白の赤ちゃんでした。いったいこの赤ちゃんにどういう意味があるのだろうか？と疑問に思った人も多いと思います。

UBUDは絵画や芸能、MASは木の彫刻、どちらも芸術の村として名高い、その芸術の村の入り口に、このモニュメントはどうもと頭をかしげてしまう。パトゥプラン村のパロン石像やパトゥアン村のピーマ石像などは、初めてバリを訪れた人にもバリらしさを感じられ理解できる彫刻であるが、この赤ちゃんの石像は、われわれツーリストにはまったく不可解そのものである。UBUDのバリ人に「いったいあれは何なのか？」と聞いても、いっこうに答えらしい答えが返ってこない。通称、ビッグ・ベイビーまたはノー・プロブレム人形と呼ぶと答えるだけで、それ以上知らない。ミステリアスな逸話がある。バリの暦で15日に一度巡ってくる、悪霊が徘徊するといわれるカジャン・クリオンの夜中にビッグ・ベイビーは涙を流す。ビッグ・ベイビーは「みずこ」の供養をしているという。いつのまにかここがみずこ供養の場になってしまった。だからノー・プロブレム人形だという。なにがどうしてノー・プロブレムがわからない。おそらく、事故の多い大きな三叉路なので「何事もなく通行できますように」との願いをこめて“ノー・プロブレム”という名称になったのだろう。

マス村は木彫の村として有名で、黒檀や百壇の木をみごとに芸術作品に仕上げていく芸術家がたくさん住んでいる。村人は、バリにブラフマ(バリの最高位のカースト)が最初に住み付いた土地がここマス村だといひ、バリ・ヒンドゥーの発祥の地だともいひ。確かにここは、今でも、多くのブラフマ・カーストの人が住んでいる。フダンダ(最高位のお坊さん)はもちろんブラフマ・カーストの人がなる。そして、マス村では、ブラフマ以外のカーストの人がなるといわれているブマンク(お坊さん)でさえブラフマ・カーストの人がなっていると聞く。極通スタッフは、このビッグ・ベイビーの製作



者であり、マス村の彫刻家であるイダ・バゲース・プトラ氏に、直接ビッグ・ベイビーの由来をインタビューすることにした。

I・B・プトラ氏が制作した彫刻は1mほどの小さなものであるが、これが拡大されSAKAHに置かれたというわけだ。名前は「BRAHMA LELARE(ブラフマの赤ちゃん)」でブラフマのシンボルだと言う答えが返ってきた。石彫はマス村のブラフマの人々によって寄贈されたそうだ。赤ちゃんは家の王様、王様の中の王様である。そして、赤ん坊は火をあらわし、小さな火はやがて、太陽のように偉大なものになるという。

今まで半分笑いモノにしていたビッグ・ベイビーも、有名な彫刻師によってつくられたブラフマのシンボルと言われたら、もう笑えなくなってしまった。しかし、通称“ノー・プロブレム人形”と呼ばれるわりには、夜、手前下方からのライトに照らされて、闇夜に浮かびあがる不気味な顔を見て「あやうくハンドルを切り損ねるところだった」というツーリスト・ドライバーがたくさんいるのには笑ってしまいます。

## グリーン・イグアナ

バリにはさまざまな爬虫類が棲息しているという。日頃、よく見かけるものにトカゲがいるが、このトカゲにもいろいろな種類がいる。今回は私が今までに見たいくつかのトカゲをあげてみることにしよう。土を這っている光りもののトカゲ、これは食べると鶏肉のようで美味しいという噂である。そして、チチッと可愛く鳴くチチャック（やもり）。明かりのそばに待機していて蚊や虫を食べてくれる。茶色と色の薄い透けるタイプがあり、透けるパイプは食用になり、ゴレン（炒める）すれば薬用になるという。話の途中で聖なる方角である山側でチチャックが鳴けば「今の話はもっともだ」と賛成し、海側で鳴けば、その逆であるという。次に、ゴロゴロというイントロで始まりトッケイと鳴くトッケイ。太い胴に短い尻尾、目玉が真丸く飛び出ている、赤い斑点がある。大きいものは30cmほどもある。グロテスクだという人もいれば、可愛いという人もいる。11回続けて鳴くとよいことがあると言われ、きき耳をたてているが、ほとんどが息切れをしてグルグルと元気のない声で尻切れとんぼで終わってしまい、11回鳴いたのを聞いたことがない。屋根裏や天井へばりついていて、不思議と角がお気にいりのようである。屋根の竹の中で鳴くと反響音の効果で大きな低音が聞ける。時にはびっくりするほど大きな声で鳴く。以上が日頃よく目にするバリのトカゲたちである。

あまり見かけないがバリにはグリーン・イグアナがいる。インドネシア語で Bunglon、バリ語で Baluan という。カメレオンと同じ保護色動物だからか、それとも数が少ないから見かけないのか。それでも、私は今までに五匹のグリーン・イグアナを見ている。胴長が15cmほどで、尻尾が30cmほど、緑と茶色に変色する。そのうちの一匹は猫に捕らえられて可哀相にも片足がなくなっていた（写真）ので放してやった。もう一匹もやはり猫に捕らえられ、すでに息絶えていた。変色する途中で捕まったのか、上半身が緑で下半身

が茶色のツートン・カラーであった。もう一匹は友人が捕まえているのを見た。動作が鈍く、すぐに捕まえられるそうだ。家に持ち帰ろうとしたが子供たちが恐がり放してやることにした。逃げていくイグアナ君はなんとお尻をフリフリ池を泳でいってしまった。あとの二匹は友人の家の庭の木に止まっていたものとカサルナ・カフェのテラスで見かけたもの。よ〜く注意をしていればあなたも見られるかもしれませんよ。

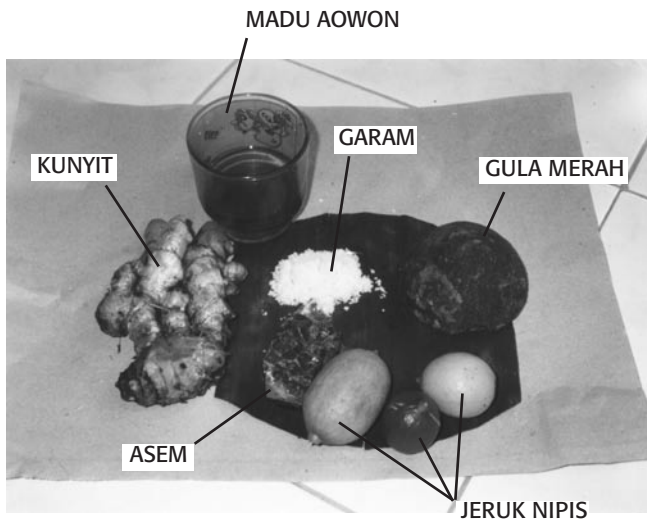
そして、これを公言すると、ツーリストがバリに来なくなり、バリの観光協会からクレームがついしまうかもしれないが、しかし真実、あえて言うことにしよう。なんと体長70〜80cmの大トカゲがバリにいるのだ。私が見かけた場所は北部バリの海辺の片田舎。あまりの驚きで写真を撮ることを忘れてしまったほどである。UBUDではなくてよかったなんて安心してはいけない。友人のS氏の話によるとクタでも見たそうだ。そしてそれは今、剥製にされS氏の自宅に飾ってある。S氏は大トカゲの肉はなかなか美味しいと言っていた。もしかすると食べたのかな。

まだまだこのほかにもいろいろな種類のトカゲがいるに違いない。ひょっとするとあなたの泊まっているバンガローの屋根裏や裏庭に得体の知れないトカゲがノシノシと徘徊しているかもしれませんね。な〜んて、脅かしてる本人が一番恐がっているのですがね。



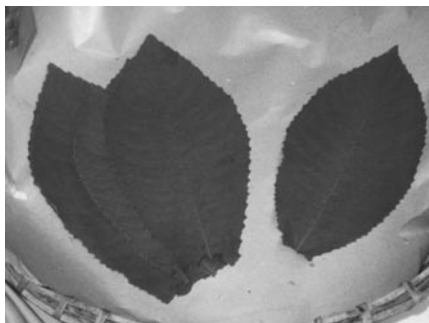


# バリ・ジャムーの話



中国に漢方、インドネシアのジャワにJAMUがあるように、バリにもトラディショナルな薬がある。一般には、飲むタイプのものを「ロロー」、塗るタイプのものを「ボレー」という。それは今でも、バリヤン（まじないによる治療師）が処方する薬や家庭で調合した伝統的な薬として重宝されている。今回はそのバリの伝統的な家庭療法としての飲み薬のひとつを紹介しよう。

私がお腹が痛い時にホーム・ステイのイブが作ってくれた飲み薬。これは腹痛はもちろん、食欲増進、そして咳にもよいそうです。材料は各家庭で簡単に手に入るものです。特に今回はほとんどの材料がホーム・ステイの庭に生えている木の葉や木の実からつくられました。まず、KUNYIT（生のターメリック）、これを生姜のようにおろします。おろしたKUNYITにJERUK NIPIS（バリのライム）、ASEM（タマリンドの実からつくる酸っぱい調味料）、GULA MERAH（ヤシからとれる赤砂糖）、GARAM（塩）を混ぜ、水を加えて練ります。沸騰したお湯の中に、DAUN SEMBUNG（SEMBUNGの木の葉）、DAUN BELUNTAS（BELUNTASの木の葉）、DAUN KAYU MANIS（肉桂－シナモンの葉）をよく洗って、練ったものといっしょに煮込みます。煮込み終わったものを冷ましてから、漉し、絞りだした汁がエキスです。エキスにMADU AOWON（はちみつ）を調合して薬の出来上がり。卵を加えるとより強くなるそうです。朝一番に毎日飲めばより効果があるということです。そして、寝起きのコビが日課の人には残念ですが、飲んだあと一時間ほどコビはひかえないと逆にお腹を壊してしまうそうです。



SEMBUNG



DAUN BELUNTAS



KAYU MANIS

薬はジュースとは違うので、けっして美味しくはありません。いっきに飲みほさないと苦くて飲めません。いっきに飲むのがコツのようです。私はチビチビと苦虫をかむ思いで飲みました。効用は確かにあったようです。

# Bagaimana Caranya?



## 「ティエッ！！」と「ショッ」

by エナちゃん

いきなり「ティエッ！！」と「ショッ！！」って言われても、何のことかわかりませんね。あなたがUBUDにホームステイする時、なるべく自分の部屋に近づいてほしくないものって何ですか？。まあ、人の好みにもよりますが、エナちゃんの実験だと、それは、犬とニワトリ。

まず、バリの犬はたいてい人が嫌がる対象の動物です。なぜかという、まずキタナイ、クサイ、ホエる、コワイ。ホームステイの部屋ばかりでなく、道を歩いていてもなるべく近くには来てほしくないものです。・・・で、犬を追い払う時、バリでは「ティエッ！！」と言います。この「ティエッ！！」は、犬専用(?)に使うコトバ(?)で、犬に対して「あっち行け！！」もしくは「コラッ！！」と言う時に使います。

今のエナちゃんの家にはキタナ～い犬が二匹いて、いちおう番犬みたいな役目を果たしていますが、コレがクサイのなんの。バリでは小さな子供が家の敷地のあちこちで勝手に「うんち」をしてくれます(要するに小さいうちはトイレのしつけをあまりしない)が、エナちゃんは一度、うちのオイっ子のしたホカホカうんちをうちの犬がその場でペロリと喰ってしまったのを見て以来、元来の犬ギライがもっと、大犬ギライになってしまいました。ウチの家族も、特に犬をかわいがるわけでもなく、さわるうともしないし、名前もありません。・・・で近寄ってくると「ティエッ！！」。バルコニーにあがってくると「ティエッ！！」としょっ中怒鳴っています。エナちゃんも、ここにお嫁に来た初め頃は遠慮がちに「ティエッ。」と言っていました。今では、近寄りなんてしたら「ティエーッ！！」と怒鳴って足ゲリを入れてしまいます。こんなにしょっ中「ティエッ！！」と呼ばれているバリの犬。きっと自分の名前は「ティエッ」だと思込んでいる犬も多いことでしょう。

さて、次がニワトリ。これはほとんど人畜無害のように見えますが、実はところかまわず“フン”を落とすという非常にやっかいなモノなのです。それに少し頭のいいニワトリだと、バルコニーの机の上のお菓子やパンを盗み喰いするという芸当もやっつけます。

・・・で、これを追い払うときには「ショッ！！」。闘鶏用のニワトリは常にカゴの中に入れていますが、放し飼いになっているニワトリは、観察するとけっこうおもしろいものです。兄弟ニワトリは、小さい頃から大きくなっても、いつもくっついて行動します。エナちゃんが、ここにお嫁に来た時、ヒンドゥー教徒になるために本来なら赤ちゃんの時にする「ピトゥン・ディノ」という儀式をやってもらった時のこと。この儀式にはつがい、または兄弟のヒヨコ(二羽)を用意して、それから庭で放し飼いにします。この二羽のヒヨコのことを「チョロン」と言い、エナちゃんのチョロンは、全く同じ白黒模様のオス・ヒヨコでした。その儀式の時には、ピヨピヨと頼りなげに寄り添っていたカワイイ・チョロンも今や立派な成ニワトリ。何羽かいる放し飼いのオス・ニワトリの中のボスです。エナちゃんのチョロンは、大きくなった今でも二羽いつも寄り添っていて、お供えもののお菓子やごはんを盗み喰いするのも、家寺の祭壇に登ってフンをするのも、おじさんの大切な闘鶏用の「カゴのトリ」に喧嘩を売って相手を興奮させるのもいつもいっしょ。そしてこの間、なんと、一羽のめんどりを二羽で交互に犯して(?)いるのも目撃してしまったエナちゃんなのでした。こんな調子だから、家族にはいつも「ショーッ！！ あ～あ、またあんたのチョロンだよ」と、いったいニワトリが叱られているのか、エナちゃんが叱られているのかわからないくらいです。

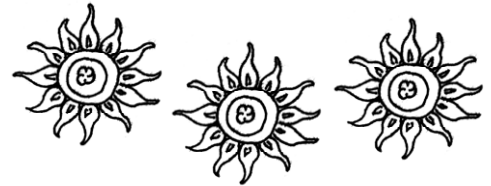
さて今回は犬とニワトリの追い払い方でした。日本では動物すべてに「シッ、シッ」ですんでしまいますが、バリでは、このように、それぞれあるのです。ちなみに嫌いな人を追い払う時は「ジョッ！！」と言ったそうです。でもこれは「あっち行け！！」って感じだから、バリでは絶対使ってはダメよ。

「子育て日記」を早く書け書けと言われてるのに、こんなしょうもないモノしか書けない最近のエナちゃんですが、どうかみなさん次号、もしくは来月号に期待しててくださいね！！





バリの舞踊



# Kebyar Legong

クビヤール・レゴン。みなさん、この踊りを知っていますか？レゴンのひとつ？

いいえ。クビヤール・レゴンこそ、現在のトルナ・ジャヤのもとになった踊りです。

トルナ・ジャヤは、女性によって踊られる“若者の勝利の踊り”。激しく、ダイナミックな演奏と振り付けが印象的な踊りです。

さて、時は1930年代。バリを愛したドイツ人画家、ウォルター・シュピースが北部バリ（当時の首都はシンガラジャでした。そう、エア・ポートもないので、シンガラジャの港が、いわゆる国際港になっていました）で初めて見て、聞いた、ゴン・クビヤールと、その伴奏で踊られるクビヤール・レゴンのことを「Dance and Drama in Bali」という本で書いています。それがとてもおもしろかったので、ここで紹介することにしましょう。

1915年、北部バリ。ここで「稲妻」を意味する「Kebyar」-クビヤール-という新しい形態の音楽がつくられた。この音楽は非常にダイナミックで、急に音が止んだかと思うとまた始まり、聴くものをいつも“はっ”とさせる。Lelambatan -ルランバタン-と呼ばれるクラシック・ス

タイルの音楽（プラのオダランなどで演奏され、テンポが遅い）とはたいへん異なっている。Kebyarは、あつという間に全バりに広がり、今日ではガムラン音楽の一般的スタイルとして耳にすることができる。

1938年。シンガラジャ・Bengkala村のI Wayan Wandresという男性が、今までの古典のレゴンとは違うKebyarスタイルのガムランに合わせて、二人の若い女性のための踊りを創作した。それは強くて大胆な動きを基に、顔、特に目を使った表現を駆使するものだった。しかし、その頃のBengkala村のガムラン・グループは、たった15人しかいなかったのので、ガムランをフル編成するために、一行はJagaraga村に移ったのだった。

Wandresが振り付けをしたその新しい踊りは、レゴン・スタイルとクビヤール・スタイル両方から名をとり、クビヤール・レゴンと命名された。その後、Wandresの弟子のひとりであったGede Manikが、この踊りをさらにアレンジし発展させたのである。その結果、クビヤール・レゴンはトルナ・ジャヤとレゴンという全く違った踊りを組合せた二部構成のような形になった。Jagaragaのクビヤール・レゴンは北部バリ全域で有名になっていった。この新しい踊りをGede Manikから学んだ、第一世代の踊り子のひとりがSawan村の故Ni Nyoman Kasningで、第二世



● '95年4月に行われたレゴンフェスティバルでクビヤールレゴンを踊るNi Ketut Kasningさん



代が、故 Ni Luh Manik と Ni Ketut Kasning (1928 年生まれ) である。

クビヤール・レゴンの前半のパートは、トルナ・ジャヤとして知られ、この踊りには非常にエネルギッシュなガムランの演奏を身体で表現できる強い踊り手が要求される。そして、後半のパートは、レゴン(正確には、レゴン・クンティールの真ん中の部分)と、ジャウックの要素が取り入れられている。

-以上、1995 年 4 月に行なわれたレゴン・フェスティバルのパンフレットより-

北部バリの各村には、昔から踊り子がすばらしいことで有名であったが、とりわけガムランが有名だった。各村はそれぞれのガムラン、そして踊りのスタイルを持っていて、互いに競い合っていた。北部の人々は、古くからある伝統的な習慣を守る一方で、時折、異端的で新しい試みをするのも好きであった。そんな中でガムランの新しいスタイル、クビヤールは生まれたのである。

村の踊り子のグループは、全て幼い少女たちで結成された。村々を散歩すると、ワンティラン(集会所)で子供、若者、年寄りがワイワイと集まり、少年たちが熱心にガムラン演奏の練習をしているのをしょっちゅう見かけたものだ。そのガムランは原始的で、烈しい気質を持っていて、目にも止まらぬほどの速さで演奏される。猛々しいリズムからは壮烈さ、華麗さ、興奮が表現されるのだ。それは、クラシック・スタイルのガムランしか知らなかった南部の人々(特にガムラン奏者)にとってはショックであった。そして、同時に絶賛された。

ゴン・クビヤールの曲を聴いていると、時々、わかりやすいメロディーの断片が、激動の中に押し流され、消えてゆき、そして再び表面に浮かび上がってくる。かと思うと、ひとつの非常に澄んだ響きがこぼれ落ちる。ひとつ、ふたつ、そのうちにシャワーのように落ちる。多くのグンデル(鍵盤の楽器)の完璧な調和の中でメロディーがぼかりと浮いているようだ。それが、チェンチェンによってふいに途切れ、その複雑なリズムによって崩されるのである。

そして踊り。踊り手の動き、振り付け、表情によって、このダイナミックな音(ガムラン)を表現する。踊り手は、カーテン(ランセイという幕)を激しくふるわせたかと思うと、ほんのかすかな笑みを浮かべ、目を輝かせてカーテンから現われる。踊り手は初め、ゆっくり、ソフトに、やわらかく、やさしく、頭と身体を傾けて首を振る。足は地面の上で遊んでいるように軽くステップを踏んでいる。突然、チェンチェンの音に合わせて Shake し、非常に速い速度で半円を描きながらまわる。そして急に、はっとするほどソフトに動く。ひざをつき半分座ったようなかっこうをして身体をふるわせる。その間踊り手の目線は矢のように、稲妻のようにあちこちへ飛ぶ。彼女たちは、速く、激しく、ささっと狭いスペースを端から端へと移動する。それでいて、木の葉が風に舞っているような軽やかさなのだ。

ガムランの激しさは言葉に言いあらわせない。演奏者の顔には興奮の表情はない。妙なくらい、無表情にみえる。しかし、彼らの身体は楽器を演奏しながら、ぶるぶるとふるえ、その動きはまるであたかも彼ら自身が楽器となって振動しているかのようにも見える。時々、激しく演奏する時は、あたかも彼らが楽器を壊してしまうようだ。何かが彼らを操って演奏しているようにも見える。

ある時、北部バリのクビヤール・レゴンの踊り手ふたりとガムランが南部の Menjali という村で公演を行なったのを観た。暗いテントの下は端から端まで人で埋め尽くされていた。演奏が始まった。踊り手の女性二人は、幕を少し揺すぶったかと思うとすぐに現われた。彼女たちは、紫色と金色の布の帽子をかぶり、深紅と金色の長袖のタイトな服の上から、胴に帯を締め付けるように巻いている。透かし彫りの入った金の首輪を付け、腰に巻いているサルンは輝く素材の黒い布だ。ターコイズと金の腰飾りには銀色のヘリが付いている。踊り子ふたりは、陶酔したような顔つきをしたかと思うとカット目を見開く。その時の目は黒目が完全に真丸く見えるまで、非常に大きく開けられている。口元は少し尖らせ気味だが、時折微かな笑みを見せる時、上唇を少しだけ上げる。すると、前歯の一本だけ金歯にしているのがちらっと見える。

北部バリでは、前の歯を一本だけ金歯にすることは、踊り手の少女にとって、なくてはならない装飾であった。暗いランプの下で踊っている少女たちの衣装のかすかな輝き、金の首輪、腰飾りの銀色の煌めきが彼女たちの顔とともにぼんやりしたり、浮き立ったり見える。それはたとえようもなくファンタスティックな光景であった。

以上、ウォルター・シュピース著「Dance and Drama in Bali」から抜粋。極通スタッフが独断で意訳したものですので、正確には本文とは多少違うところがあります。

さて、いかがでしたか? 私たちが日頃よく目にするゴン・クビヤールとトルナ・ジャヤの踊りをイメージしながら読むととてもおもしろいですね。それにしても、踊り手が前歯の一本を金歯にしたなんてユニークです。薄暗いランプの下で踊られたふたりの少女によるクビヤール・レゴンは、さぞ魅力的だったことでしょう。

今回、ウォルター・シュピースの原文(英語版)を UBUD 滞在中の貴重な時間をさいて翻訳してくださった、アメリカ、シアトル在住の吉田ゆかりさんに感謝を捧げます。

どうもありがとうございました。

# 原生林を訪ねて

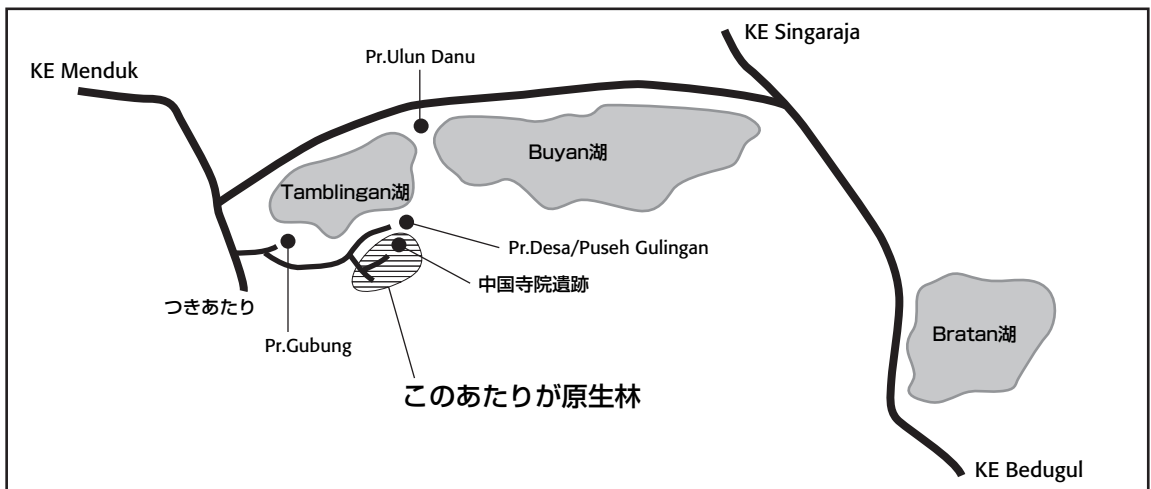
## 黄昏野ライダー

熱帯の島バりにジャングルのイメージがしないのはいったいどうしたわけだろう。われわれツーリストには、バリの森は整然と、どこまで行っても絵はがきのような美しい世界しか目に入らない。最近トップサヨのロスメンの裏や村外れに、今だに雑然とした森が残っているのを見つけた。UBUDも昔は森の中にあったのを想像できる。しかし、ジャングルというスケールではない。

植林や間伐をした、人が手を加えた森ではなく、大樹や植物たちが自然の摂理の中で共存する原生林、ジャングルを私は見たいという衝動にかられた。そして、少ない情報を頼りに、今だに残っているといわれる熱帯雨林を探索に、バリ島中央部を訪ねてみた。

UBUDから目的地の中央部への道順は、まず、チャンプアンを抜けてサヤン村に出、さらに、タマン・アユン寺院のあるMENGWIに向けて進む。タマン・アユン寺院の前を過ぎるとMENGWIの交差点に出る。それを右折し、一路北へ北へと果てしなく進む。なだらかな坂に少し勾配が感じられるあたりからドリアン売りの屋台が目につき始める、ここは誰が名付けたのかドリアン街道と呼ばれる。ドリアンのシーズンの雨季にはたくさんの屋台が並び、果物の王様の味を満喫できる。ドリアンは一つRp:2000-からRp:4000-ほど。美味しさのほどを一度お試しください。果物の産地プキッ・ムンスの市場に近づくに従い少し肌寒くなってくるので、長袖のシャツが必要

である。市場にはさまざまな果物や野菜、香辛料、そして蘭の花が売られている。市場を過ぎ、ひと山越えるとプラタン湖に出る。プラタン湖に浮かぶウルン・ダヌ寺院を右手に見てさらに進むと、左手にBUYAN湖の見渡せる急坂にさしかかる、ここには野性の猿が道に出て観光客に餌をねだる。坂を登り切ったところに見逃してしまいそうなYの字に曲がる道がある。それを左折すると、外輪山の尾根の一本道が続く。左眼下に雄大なBUYAN湖の景色、右手にはなだらかなスロープが遠くロビナの海岸に続く景色を眺めてのツーリング。この道は時として、霧が立ちこめるので注意。しばらく進むとBUYAN湖の向こうに、小さい湖が見えてくる。あたかも母なるBUYAN湖の懐で安堵する子供のように愛らしい湖、TAMBLINGAN湖である。友人がこの湖を見て「十和田湖のようだ」と感想を述べた、が残念ながら私は十和田湖を一度も見たことがない。上から見るTAMBLINGAN湖は四方を森に取り囲まれ、湖面は深い緑だ。水藻がほとりを緑に縁取り、いっそう湖の色を濃く映し出している。原生林はこのTAMBLINGAN湖のほりにあると聞いている。湖に続く道は途中からデコボコの土の道となる。ハンドルに気を取られているといきなり林の切れ目から忽然と視界が広がり、湖が現われる。得体の知れない動物の啼く声があたりをこだまする。湖面は限りなく波静かで、人を寄せ付けぬ神秘さを漂わせている。三・四人の人が目にはいるだけで他に人がいない。文明の匂いがいっさいないところだ。ここはまだ観光客も少ない。湖畔のワルンでコピを飲んで一服。よく見ると、湖にイカダが四つ浮かんでいる。ワルンのおやじさんが「釣りをするためのイカダだ」と教えてくれた。丸太をくり貫いた舟が三艘、これにのってイカダに渡るようだ。ワルンで竹の釣り竿を貸してくれる。今回の旅の目的は釣りではなく、原生林の探索である。愛バイクに乗っていいよ原生林へ出発。

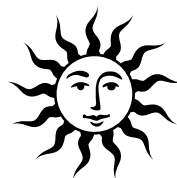


車が一台通るのがやっとという道幅に、道を塞ぐようにブッシュが生い茂っている。バイクに乗っていても、枝がヘルメットにあたる。10分ほど走ると、湖畔に添った道に森からの道が交わる。その森からの道を入り、100mほど入った地点に左に行く道があった、どうもこの道を入ったところに原生林がありそうな匂いがする。バイクを道端に止め、歩いて進むことにした。足の裏に土ではない感触がはしる。道は落ち葉が何年も積もった腐葉土である。前方に20mもあろうかと思われる巨木が見える。進むうち、左右にそびえる木々がすべて巨木であることに気がつく。苔が覆われた老樹の巨木が幾本か原始のままの姿でそこにある。幹や枝はどれをとっても似た形はなく、老樹が織り成す自然の芸術作品である。見飽きないほどとり憑かれてしまう樹がある。道から森の中には木々の群生が人間の侵入を阻んでいるようだ。規模は小さいが原生林はあった。この空間にいると自分がいかに小さい存在であるか、そして自然の偉大さとエネルギーを肌で感じた。体いっぱい、すばらしい空気とパワーをもらった。こんな自然をわれわれは残しておく義務がある。そんなことを痛感して帰路にたった。

ワルンで知合ったおじさんが、今度の満月の日に湖畔の寺院・Pr:GUBUGでオダランがあるという情報を教えてくれた。寺院には立派なメルー（ほこら）があるが、塀は人が覗けるほど低く、割れ門も質素である。この人里離れた山深い湖にある寺院のオダラン、この神秘的な空間でどんなことがおこなわれるのかと興味が惹かれ、後日出かけてみることにした。寺院はバトゥカル山を背にしている（UBUD近辺はアゲン山を背にしている）。その日は山の頂に霧のかかった、どんよりの曇り空であった。境内にはたくさんの方々が座り、儀式が始まるのを待っている。そして、情報をくれたおじさんがトランスしているのを目撃した。こ



の寺院はタバナンから移り住んだ人の寺院で、対岸にあるPR:ULUN DANUはシンガラジャから移り住んだ人の寺院だそうである。この湖畔には、他にPr:DESA/PUSEH GULINGANと中国寺院の遺蹟が原生林の奥にある。湖畔の寺院を丸太のカヌーで巡るにもおもしろいかもしれない。でも、こんなミステリアスなこんな話もある。なんでも、ここで釣りをしている人（近くのムンドック村の人）がよく行方不明になり、その一月後に遺体がロビナの海岸に打ち上げられるというのである。湖底のどこかにロビナの海まで通じている洞があり、静かな湖面に反して湖底は渦巻いていて、おぼれた人を運び去ってしまうそうである。ひょっとすると恐竜でも棲んでいるのかな。そんな話が信じられそうな湖である。







ぶん●中田恵 / いらすと●佐藤純子

### ● 10月21日

目覚めれば又強い陽射し。今日あたりさすがに疲れが出てきたようだ。日本に帰りたい、とは思わないけれど、ウブドに帰りたい。でも、ここまで来たらやっぱり西の方まで行ってみたい気もする…。そんなことを考えながら、なんとなく、何もする気にならなくてこの、やけに居心地の良い Rini ホテルの部屋でぐたくぐた時間を過ごしてしまう。このホテルには4才になるアユという白人の女の子がいる。すごく可愛い。見た目は白人なのに口から出るのは完璧なインドネシア語だ。聞けばこの宿はバリニーズの奥さんをもらったスイス人の男性がやっているということ。いつもレストランの奥で新聞を読んでいる、眼鏡をかけた、優しくなおじさんがきっとその人だろう。ここの従業員は一人の控え目な男の子を除いて、ほとんど女性ばかり。前にロビナの某中級リゾートホテル

に泊まった時は警備員に口説かれまくって大変な目にあったから、それを思えばスタッフが女性ばかりと言うのはありがたい。10時頃、思い立ってシガラジャ走行してみようと行動を開始。ホテルの女の子にベモのルートと値段を確認。ちなみに“地球の歩き方”で“Banyusari”と記されているシガラジャのベモステーションは“Banyuasri”が正しい。まずロビナからこのバニユアスリまで、そしてバニユアスリで市内行きのベモに乗り換え、とりあえずパサール走行してみることにする。しかし行動を開始して、思っている以上に自分が疲れているのを知る。何もかも、煩わしいのだ。「マウ・クマナ？」と言われても「どこ行こうとあたしの勝手でしょ。あーうるさい！」と思ってしまう。「トランスポート？」と声をかけられると「いらぬ！うるさい！」と思ってしまう。話しかけられても答える気にならない。ウブドを発って10日、ということは日本語の会話をまったくしなくなって10日、ということでもある。インドネシア語を使うのはやはり常に頭を働かせていなくてはならないし、やっぱり時々…いや結構わからないこともありストレスもたまる。頭を使わなくて話せる日本語の会話に少し飢えているのかもしれないなあ。パサールを一通り見て、ルママカンでテ・ボトルを飲み一服。シガラジャに来たからには美味しい中華料理を食べなくては…とチャイニーズ系のルママカンでナシゴレンを注文する。うーん、いろいろしてるのはもしかしたら食べ物へのせいかもしれない。一人だから、ということであまりにも何も考えずラーメンが続き過ぎた。注文したナシゴレンは予想通りちゃんとした炒飯で充分満足。でもこれではまるで  $(500 + 500) \times 2 = 2000$  のベモ代を払って2400の炒飯を食べに来たようなものだ。しかし旅なんてそんなものだ。いや人生そのものがそんなものだ。大いなる無駄の繰り返しなのだ。何を言っているのだろうか…。

炒飯を食べただけでシガラジャを後にし、ホテルに戻って昼寝。ロビナは本当に暑くて太陽が高いうちは何もする気にならない。夕方起きてマンディして少し海岸を散歩してから食事に出る。今日は美味しいシーフードでも食べることにしよう。一人だと確かに食事にお金をかける気にならない。でも気分転換にもなるし、たまにはお金をかけることも必要かもしれない。とは言っても一人旅の悲しさ。一品しか頼めないし特にシーフードはヘタに量が多いとかえて困る。ホテルの前の Gung に立つ一軒のチャイニーズシーフードの店に入ってみることにする。貫禄ある店のおかみに愛想良く出迎えられ、中へ入ると、店の中ではここの

人と思われる年配のババババが煙草を吸ってお喋りしているだけだ。まだ客はいない。がらんとした、なんだかのんびりしてて、ちょっといい雰囲気である。メニューの最初のページに「当店のお薦め」がある。素材と調理方法とソースをチョイスするセットメニューだ。ご飯とフルーツのデザート付きだと言う。ちょっと高かったけど、「本日のお薦め」キングプロウンのバカール、ガーリックバターソースをチョイスする。注文を受けるとおかみはやはり店の奥に座っていた女の子二人を立てて厨房へ入る。なんだか総勢で取り掛かり始めた…という感じだ。待つことしばし…美味しそうな焼き海老と野菜がたっぷり入ったガーリックバターソースが運ばれてきた。ゆっくりと味わって一人充実のディナータイム…。食後のフルーツを頂いていると店の男の子が「ここに座っていいか」と聞く。どこに泊まってるのとか、ロビナへはいつ来たの、というような他愛のない話をしていると、さっきから興味深げに奥で見ていたババ達が「彼女インドネシア語出来るのか」と聞いてくる。マデというその男の子が「出来るよ」と答えてからはもう大変。マデが仕事を席を外す度に（結構客が入って来ていた）ババ達がいれかわりたちかわりやって来る。思った通りこのババ達で中国系、東ジャワの出身だと言う。なんだか孫に昔話を喜んで聞かせるおじちゃんみたいである。「日本語は難しいねえ、わしゃ喋れんよ」「昔はね、日本語の勉強もしたのさ、だけどねほら“ノ”とか“ニ”とかあるだろう、日本語には。“ツクエノウエニ”とか“ツクエノウエヲ”とか、あれが難しい。はっはっはっ、煙草吸うかね？」テーブルの上にあったのはマデの煙草だ。「でもそれ…」「あー構わん構わん、吸いなさい」そのSAMPOERNAという煙草はかすかなクレテックの香りがして実に美味しい。「これ、美味しいね」と言えば「そうかね、もう1本どうだい」「でも…」「いや、吸って。インドネシアではそんな事遠慮しないでいいんだよ。君が日本に帰ったら君が日本でインドネシア人に同じ事をしてくれたらいいんだから」とマデ。「コーヒーでもどう？」「でももうお腹が一杯」「ゆっくり飲めばいいさ、大丈夫サービスするから」お店の子が、ババ達がいれかわりたちかわりやって来て、なんと私はそれから2時間もそこでお喋りしていたのだった。さっき私に煙草を勧めたババがいなくなったと思ったら戻って来て私の前にその煙草SAMPOERNAを置く。「え？これ…」「取るときなさい、わしからだ」コーヒーも飲ませてもらってお土産に煙草までもらってしまう。美味しいものも食べたし、私はその日、本当にとってもとっても幸せな気持ちで、レストランを後にしたのだった。

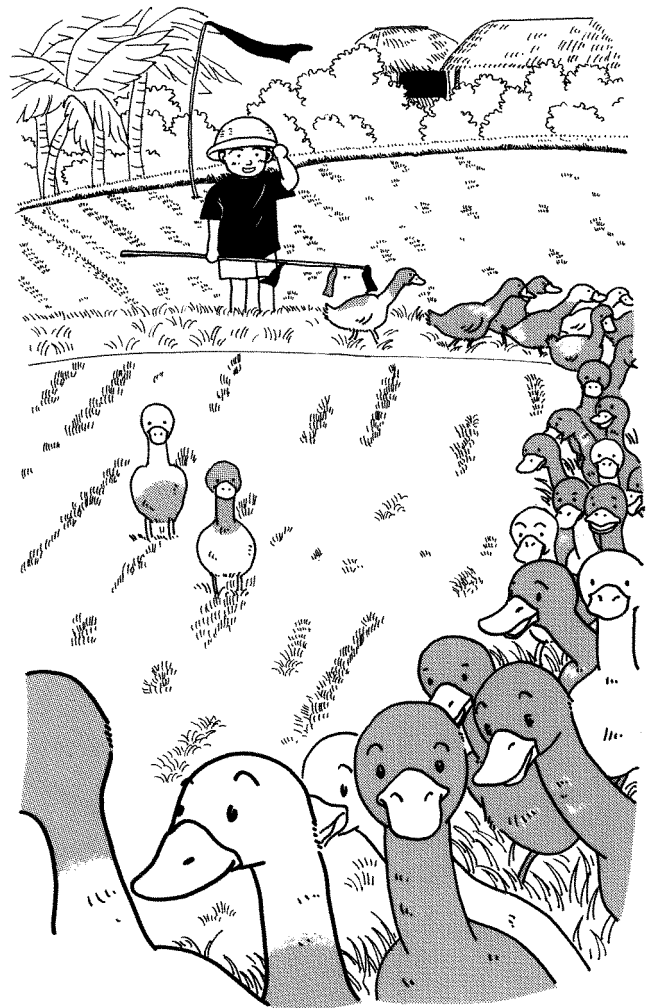
おいしいものを食べたら元気になって、早朝よりロビナ名物のドルフィンウォッチングへ…。我々のジュクンが沖に着いた途端前方にイルカの群れ。かなりの大群だ。ゆうゆうと泳いでいる。ざっと見て、30～50頭位の群れが4つ。ほとんど同時に4方向で姿を見せる。派手なジャンプこそ見せないが背びれを海面に出してうねるように泳いでいく姿が波間に続いて行く。たっぷり1時間そんな姿を眺めて、さあ帰ろう、という時になって、なんと我々のジュクンは2つのイルカの群れに挟まれた。右と左、同時にすぐ近くにイルカの姿。「わーすごーい」と思わず日本語で言えば船頭も「ヒャッホー！バグース！」と叫んでいる。イルカ達に見送られて岸へ戻る。

それにしてもロビナがこんなに暑いのはやはり赤道が近いからだろうか！？チャンディ・ダサの比ではない。一日中だらだらと過ごす。天井のキバスを回し、思いついたら水シャワーを浴び、サロンを巻き付けてタイルの床でごろごろ。ごろごろしながら回っているキバスをぼーと眺めていると、気分はすっかり山田詠美である。白ワインがあれば完璧である。怠惰にして甘美な時間、とでも言うのだろうか。夕方を取り直して両替に行く。まだ充分残っているけれどこの後行こうと思っているヌガラの様子がわからないので1万円だけ替える。レートはチャンディ・ダサと同じだ。ロビナの両替屋は他のところのように、これみよがしに表にレート表を出していないので少し困る。店の中のレート表をこそこそと見て、その中で一番レートの高い所で替える。本当はもうウブドに戻ってしまいたい気持ち半分、でも折角ここ迄来たんだもの、もうちょっと頑張りましょうよ、みたいな気持ち半分、というのが正直なところ。ホテルの子に、ギリマヌク〜ヌガラのルートについて色々教えてもらう。一度シガラジャ迄出て長距離バスに乗った方がいいようだ。ギリマヌクでの乗換えが少し心配だが、でもヌガラ行きのベモはすなわちデンパサル行きのベモである。そんなに早くなくなることはないだろう。またシガラジャの時のようにSopirに囲まれてしまったら…、と思ったりもするがそれはそれで、ま、なるようになる、でしょう。ババ達にお別れを言おうと思い、夕飯に又昨日の店へ。席につくなりババが煙草を持って来てくれる。今日はタオチョウソースのイカンバカールを頼む。食事を終えると又ババがやって来る。「お邪魔していいかい？」「はいどうぞ」今日のババは昨日の煙草のババと違ってもう少し若い。昨日のババの弟さんかしら。このババはしかし結構なインテリで会話のレベルが高い。聞けば以前はカラングッセムでソーシャルワーカーをしていた、という。1979年の地震の後、一族でロビナに移ったそうだ。「日本に限らず、近年アジアの国々は西洋の、特にアメリカの文化が急激に入り込んで来て

いるが、あなたはこのことについてどう思うかね」なんと！“Bagaimana pendapat anda”と言われてしまった！これはまるで、インドネシア語会話クラスだ。バリに来て、こんなに真面目にちゃんとインドネシア語の会話をするのは、もしかしたら初めて、かもしれない。どきどき…。答えは“Menurut saya”から始まるんだ…とそれはわかるんだけど、さて、どう続けられいいのか…。以下はあくまでも、「こんな風な事を言っているのだと思う、そして私もこんな風な事を喋ったつもり」という大前提の上に立つ会話であることを、一言お断りしておく。「いい所もあるし、悪いところもあると思います。例えば日本はアジアの国の中で既に先進国になりました。結果私たち日本人は金持ちになり、学校も仕事も結婚も自分で選べる自由を得ました。こうして私のように外国を2ヶ月一人で旅することも出来ます。」パパはふむふむと頷いて聞いている。「でも、変わってしまったこともあります。若い人は東京に出たがり、田舎には老人が残されます。バリのように家族と一緒に住んでいないことも多いです。」「年寄りも年寄りだけで住んどるのかね？」「そういう所もあります。」「日本には子供は沢山いるかね？」「仕事をしている女性が子供を持つと仕事が続けられなくなることが多いです。だから日本の女性は最近余り子供を欲しがりません。」「しかしそれはきっといつか新しい問題になるだろう。」「日本にいと日本での生活が当たり前でなかなかこういった事も考えることがありません。私はこうしてバリに来ると日本人がなくなってしまうものが何かということを考えます。今私はベモでバリを旅してます。色々な所へ行って、もっともっと色々なバリ人と沢山話がしたいと思います。」「しかし気をつけなさい。バリには詐欺も沢山いる。あなたみたいな外国人には倍の値段を言う人もいるだろう。しかしバリを色々見て回るといい。そうだな、もしバリを知りたいのだったら、カラングッセムに行くといい。あそこはバリの中で一番貧しいところだ。」「一番貧しい？」「そうだよ。あそこはバリの中で一人あたりのGNPが一番低い所なんだ。クタヤウブドの人は金持ちだよ。観光客が沢山来るからね。でもカラングッセムの人はほとんどが農民だ。バリでは一番貧しい所なんだよ。」「パパ、私ここに来る前ティルタ・ガンガにいたのだけど子供たちに“Minta pen”とか“Minta uang”とか言われました。」「貧

しいんだよ。だけどそう言われてもお金をあげちゃあいけないよ。それは何の解決にもならないんだ。あんたがもう一度カラングッセムを見たいならわしが案内してやろう。わしが連れていってあげるよ。ベモで行けばそんなにお金もかからない。いつでもここへおいで。わしはここで待っているよ。いいかい、クタヤウブドだけがバリではないんだよ。本当のバリは田舎にあるんだ。」気がつけば又ゆうに2時間話し込んでいた。パパ達に明朝発つことを告げて店を後にする。

やっぱり一人旅は常にどこか緊張しているものだ。何か事が起きた時責任が全て自分にあるというのは結構しんどい。そんな事を10日以上続けてきて、知らず知らずの内に私のストレスも溜まっていたようだ。それに加えてティルタ・ガンガではグスティのことやら、“Minta uang” 攻撃やらで、正直“もう嫌！”って思ってしまうことがたて続けに起こった。ロビナに着いた時は“もうほっといて！一人にして！バリ人うるさい！”ってちょっと思っていたかもしれない。余裕が





なくなっていたし、旅人の私に向けられる好奇心が正直わずらわしかった。でもここでこのパパ達と出会って、私の気持ちも少し変わってきた。今、このパパの話だけで、私が見たカラングッセムの風景だけで、私が何かを判断することなど勿論出来る筈がない。ただ、ひとつだけ言えることは、私が見たその全てが、バリだったのだ、ということだけ。

昼間はあんなに暑いのに、太陽が沈めば空気が冷えて過ごしやすいロビナの夜。きれいな星空を眺めながらホテルまでの道を歩く。途中の家で何かのウパチャラがあったらしい。昨日も沢山の人が出入りしていたけれど、今日は中でワヤンを上演しているようだ。あれもバリ、これもバリ…私はやっぱり、もっと色々なバリをこの目で見てみたい。

## ● 10月23日

朝食を終え、居心地の良かった Rini ホテルをチェックアウト。Gung を出て大通りに出た途端通りがかったベモが止まる。が、そのベモ、満員なんてもんじやない。それでも車掌は乗れと言う。荷物を抱えて 30 センチ位の隙間に座ると発車。バニユアスリで降りる。バニユアスリのベモステーションには奥に 3 台の大型バスが並んでいる。“ギリマヌクへ行きたい”と言うとまん中に乗れ、と言う。あの、でもこのまん中のバスがなんだか一番ボロに見えるんですけど…。仕方ないか…。が、しかしそのバス、“どーやって乗るの?”と言う位人が乗っている。前方の座席と座席の間に小さな台が置いてあって、そこに座れと言う。まあ、きっと“補助椅子”のつもりなのだろうけれど、その台が又私のお尻の“半分”くらい大きさである。それに第一、そこ迄行くのが一苦労だ。まず乗降口と座席の間のわずかな隙間に荷物を押し込む。補助椅子の台まではすぐなのだが、なんせ右も左もしっかりとパパが座っていて、“どうしたらここに座れるの?”と考え込んでしまった。すると後ろに座っていたパパが“こっち向いて座んなさい”と言う。そうか、何も律義に進行方向を向いて座らなければいけない訳じゃないんだ。後ろを向いて、お尻をその台に乗せる。でもこの姿勢で長時間はちょっと辛いかもしれない。と思う間にバスは発車。乗っている人も多いが、このバス途中下車する人も多い。すぐに前の座席が空き、窮屈な姿勢からは解放された。が、今度は荷物が私の視界に入らない場所になってしまう。内心ドキドキ。でもここで焦ったってしょうがないし、こんな状況の中で自分の荷物だけ手元に置いておくことなんて不可能だ。荷物も私も無事目的地に着くと信じよう!と、そう決意してからは何だかちょっと気がラク。右にロビナの手、左に水田を見ながらバスは進む。だんだん風景から椰子の木が消えてかわりに名前にはわからないけれど

日本でも見るような木が増えていく。箱根か中伊豆あたりをドライブしているような感じだ。バスの乗降口横にビニール袋に入ったお供えが吊してある。(パサールで無造作にビニール袋に入って売られている状態のお供えを想像してください。)それを車掌がごそごそやっていると思ったら中から 1 個お供えを取り出した。バスとはあるお寺?とおぼしき所に止まる。“Makam Jayapurana”とある。伝説の悲劇の主人公ジャヤプラナの墓だ。ここで車掌はお供えを持ってバスから飛び下りる。石像や石台に黄色と黒白の布が巻かれ、そこに沢山のお供えものが置かれている。車掌がそこにお供えを置くと、僧侶がやってきて、バスの正面にまわりバスに聖水をふりかける。ものの 10~15 秒でバスはすぐに発車。この後は西部国立公園に入り道は一直線、民家もないのでバスを降りる人も乗ってくる人もいない。運転手はすごいスピードでとぼすとぼす。90 キロ~100 キロは出ている感じである。運転席の後ろにいた私は、こわいもの見たさに身体を乗り出してスピードメーターを覗き込む。でも一体何キロ出していたのか、私は知ることができなかった。スピードメーターは壊れて動いていなかったのである。チェキックという西部国立公園入口の街に出てバスは大きく右に曲がる。そしてほどなくギリマヌクのベモステーションに到着。2 千払ってバスを降りる。すぐにオジェックとおぼしき、ヘルメットを持った男の子達が寄って来るがそれを無視してバスの並んでいる所迄歩く。「デンパサールか?」と聞いてきたパパに「ヌガラまで行きたいんだけど」と言えばベモを教えてくれる。ベモに乗り込み持っていたアクアを飲んで一服。時間は 11 時 10 分ーロビナから約 2 時間半だ。ここからは、40 分ほどでヌガラに到着。千払ってベモを降りる。ロビナからヌガラまでトータル 3500 か。とにかくほっと一安心。時間は 12 時を少しまわっている。疲れた。のどがカラカラ。ホテルを探す前にまずは食事である。ドゥカルの行き交うなんともどこかできれいな街ヌガラをひたすらルママカンを探して歩き、“Victoria”という店を発見。冷えたアクアをごくごく飲みナシチャンプルにかぶりついたのだった。このナシチャンプルが実に充実のナシチャンプルで、卵、ガドガド、グレイアヤム、ミゴレン、バビゴレン、それにバビとジャがいものしょうゆみりん含め煮、とでもいうようなものがのっついて、このしょうゆみりん含め煮が又昔懐かしいお弁当のおかず、といった感じで、とにかく元気になる味なのだった。ルママカンで確かめたところ、すぐこの先に Wira Pada という大きめの宿があるらしい。すぐ、とは言ってもこの暑さの中、荷物を持つての移動はなかなか辛い。しばらく歩いて目指すホテルを発見。フロントで聞けば、部屋は AC 付きが 2 万 5 千、ファンルームが 1 万 5 千と言う。部屋のつくりは

大して変わらないのでファンルームで充分だろう。案内された部屋で、荷物を置いてくつろいでいるとホテルの男の子がお茶を運んで来てくれる。このホテルは入口がレストランになっていてそのレストランの脇の道を入るとホテルのフロント、その先に広い中庭を囲むようにコの字型に部屋が並んでいる。中庭、と言ってもコンクリートの地面で、駐車場、と言った方がいいかもしれない。バレがまん中にひとつあって、まっ昼間だと言うのにホテルの従業員と思しき男の子達がトランプの真っ最中である。ま、パリでは良くあることだけど…。お茶を運んで来た子が“いつまでいるのか、何か予定があるのか”と聞く。「まだわからないけれど…サンカルアゲンに行ってみようかと思っているのだけど…」と言うと

「スウェントラさんの奥さんの知り合いか?」と言う。「スアールアゲンを知ってるの?」「知ってるさ、友達も一杯いる」なる程、さすがにここはヌガラだ。

それにしてもロビナに負けずここヌガラも暑い。この暑さでは到底外に出る気がしない。

ホテルの部屋で、涼しくなる夕方をひたすら待つ。がこのホテル、どういう訳か中庭にすごい勢いで蠅が異常発生している。テラスに出てお茶でも飲もうと思えば、からだ中に蠅がとまることとなる。別に蜂じゃないし蚊でもないのだから、

蠅がとまる位痛くも痒くもないのだけれど、でもやっぱりあんまり気持ちのいいものじゃない。で、部屋の中に入ればこれがファンルームとは名ばかりの壁面上部で申し訳程度に回る換気扇ルーム、部屋の中はうだるような暑さ…でも窓を開ければこの部屋の中にまで蠅が入るかもしれない

し…。けちらないでACルームにしといた方が良かったかしら、とちょっと後悔。部屋の中とテラスを出たり入ったりして時間をつぶし、ひたすら陽射しがやわらぐのを

待つ。そして4時半…そろそろ風が心地好くなって来た。パサールでも見て来よう、と街に出る。ついでにスーパーで買い物でもしようと思えば、なんとこのヌガラの街、この時間ほとんどの店がもう入口を閉め、店終いしている。勿論観光客らしい外国人の姿は皆無。パサールを覗きながら歩いて

いれば、いきなり“Cari apa?” はなからインドネシア語である。“見ているだけです。”などと言え、”変な奴”とでもいうようにじろりと見られてしまう。外国人を見たら観光客と思え、といった雰囲気接客してくるどっかのパサールとはえらい違いである。

勝手なものだ。声をかけられたらかけられたで“うるさい!”と思う癖にこうしてはなから相手にされない”もっと構って!”と思ってしまう。我が儘な観光客である。しかし驚いたことに、道を歩いても“観光客”として私を見て、声をかけてくる人が皆無だ。本当は興味があるのかもしれないけれど、見ているような見ていないような微妙な角度で、皆が視線をよこすだけ…。全く見ていないのじゃないけれど、あからさまに見てもいない。あからさまな態度を取られたのは道端で昼寝していた犬に思い切り吠えられた位だった。犬にも私が外国人だということがわかるのだろうか。それにしてもヌガラの人は結構シャイだ、そんなことを思いながらホテルへ戻る。

ヌガラまで来たのには、ひとつ訳がある。言わずと知れた“ジェゴグ”である。今まで縁あって2度、ヌガラでジェゴグを聴く機会に恵まれている私だが、聴けるものなら何度だって聴きたい!勿論、ヌガラに来れば必ず聴ける、ってもんじゃないことは、良くわかっている。でもせめてここまで来たのだからカズコさんに連絡して、ご挨拶がてらお伺いしようか、そうしたら練習くらい聴けるかもしれないし…と、



そう思った私は、散歩からの帰りホテルのフロントにあった公衆電話でカズコさんに電話をすると、電話に出たカズコさんの第一声、「丁度良かったわ、あなた今日ウチでジェゴグがあるのよ。そこのホテルの子だったらウチ良く知ってるからホテルの子に言って連れて来てもらって」！！それから後は、もう何が何だか…とにかくあわてて支度をし、ホテルの子にトランスポートを頼みバイクの後ろに乗って、そして30分後にはあの懐かしいスウェントラさんの家の前にいたのである。嘘のようだが本当だ。そしてもうひとつ驚いたことに、今日のチャーターは懐かしいウブドの影武者御一行様であった。半年振りに会うババ伊藤は髪の毛を切ってすっかり男前になっていたの、一瞬誰だかわからなかった程だ。そしてあたりが暗くなると、スウェントラさんのお話と祈りの演奏と共に、ジェゴグの始まり。ヌガラの間の中に竹の音が吸い込まれていく。スウェントラさんの言う通り、本当に“調和のとれた”音…。スアール・アグンの面々は、全くいつも悔しくなる位、思わず嫉妬してしまう程に皆、いい顔をして演奏している。そして瞳を輝かせて見つめる子供達。本当にこの子供達がかわいい。演奏中、低音部を聴きたくて後ろへ回りジェゴグの下にしゃがみこむと、そこには先客-3人の女の子の姿があった。“こっちへおいでよ”とばかりに手招きされる。“Your name?”と一人が私に聞く。名前を教えて私もその子の名前を聞く。思い出した。4年前-初めてバリに来た時、初めてここヌガラでやっぱりこうしてジェゴグを聴いた日。まだインドネシア語が喋れない私は、やっぱりここでこんなふう、女の子に名前を聞かれた。あの子は“アユ”と言っていた。今もここにいるのだろうか…。あの日は初めてのバリ島旅行も最後、1日中クンパサリを歩き回ってそしてヌガラに来てジェゴグを聴いたんだ。そしてその後、帰りの飛行機の中から私は高熱を出した。バリにすっかりやられたのだ。でもあれから、あの時からバリは、目に見えないパワーで私をひきつけて放さない。あの時アユと、もっと言葉を交わしたくとも、たどたどしい英語以外の共通の言葉を持たない私たちは、ただ、微笑み合うことしか出来なかったんだっけ…。今ならもう少し、あの時よりは沢山の思いを、言葉に託すことが出来るようになってきているかもし

れないのに…。

あの時のアユは、あの時の私を覚えているだろうか…。そんな事を考えながら、子供達と写真を撮り合っていていたら、いきなり周囲の空気が変わる。「あー、ム balan 始まっちゃったよ」でもこのム balan、低音ジェゴグの下で聴くと又別の凄く迫力！一通り色々な場所で音を聴き、最後には正面で音のうねりの中に投げ込まれてみる。あー、やっぱりかなわないよ。これだもの…かなわないよ。もともと立ち向かうつもりは毛頭ないけれど。無駄な抵抗はやめた方がいいね。ただただ音のうねりに身をまかせ身を漂わせれば…涙なんか出てくるのだった。今、ここにいる自分に対して、ここにいられたことに対して、素直に素直に神に感謝したい…そんな気持ちになってくるのでした…。

●つづく●





## ワイロ / SOGOK

## ある事情通

Vol.16 でコミッシーについて書きましたが、今回はもう一つ、インドネシアに長期滞在するにあたって理解しておく必要のあるものに、ワイロ（インドネシア語で SOGOK）がある事をお教えしよう。ワイロは秘密裏に行なわれるのが普通であるが、インドネシアのワイロは、シークレットなものではなく公然と行なわれるソデの下である。これは、ツーリストや外国人長期滞在者に対してだけではなく、一般庶民にも要求され、国民生活に浸透しているものである。

たとえば、警察官である。警察官になるために警察学校に入学するのだが、まずここでワイロが必要となる。そして、警察官になっても昇進するために、またワイロが必要となる。こうなると、警察官になった暁には、おのずと自分もワイロを要求するの自然の道理で、理解できる。

こんな話を聞いたことがある。車やバイクを運転中に道路で警察官に呼び止められ、免許証や車の書類の提示を求められて困った場合、お金で解決できる場合があるそうだ。そういう時、お金を他人が見えるように渡すと彼らは嫌がり「そんなものは受け取れない」と正義感を見せる。さりげなく他人に見えないよう渡すのが「ソデの下」のソデの下たる由縁である。あとは「ありがとうございました」とお礼を言われて別れることができるそうだ。

イミグレーションの役人も同様で、バリに出入国する際に、空港でこんな経験をしたことはありませんか？これはワイロでなく単に嫌がらせかもしれないませんが。たとえば「お土産、お土産」コールや別室に呼ばれて因縁を付けられてお金を要求されたりする。パスポートの期限切れやオーバー・ステイならまだしも、何度もバリを訪れているという理由から、いちゃもんをつけられることがある。そんな時は、頑固に自分の正当性を片言でもいいから、英語やインドネシア語で主張しよう。まくしたてるのもよし、言葉ができない場合はとぼけるのもよし、そしてお金を払うのもよしである。極通スタッフの友人のひとりで、UBUD で踊りを習っていた Y 嬢。彼女は入国の際、イミグレで滞在目的をたずねられ「バリ・ダンスを習っています」と答えた。しかし、審査官は「ウソだろう？本当はビジネスじゃないのか」としつこく疑うので、Y 嬢は、その場でバリ・ダンスを披露したのである。イミグレで彼女のうしろに並んでいたツーリストは、さぞ

びっくりしたに違いない。以来 Y 嬢は、別称「イミグレで踊る女」と呼ばれている。

また長期滞在のためのビザの延長で嫌な思いや困った経験をした人も多いと思う。これがインドネシアの国策かと勘繰ってしまいたくなるほど、公の仕事にはワイロがつきものである。悪いと批判しているのではなく、日本のようにシステム化されてルーズなよりはわかりやすく、考えようによってはやりやすい面もあるように思う。ワイロを渡す時は、お金をただ渡すという行為は彼らは嫌がるので「私を救ける方法はありませんか？」とお願いするのがよいようだ。

コミッシーとワイロ。どうも裏街道の人生のようで嫌いな人もいるだろうが、これがこの国の習慣と考えれば気も楽になる。しかし、あくまでも、ワイロで解決するか、そうしないかは、あなたの自由である。それ以前に、ワイロが必要になるような問題をなるべく起こさないようにするのが一番いいのだが。



# DARI JEPANG

## UBUD 病患者 M のうわごと

みきゆきのみき

ある飛行機の中での会話。

私：もしさあ、この飛行機がハイジャックされて、そのハイジャッカーが「BALIへ引き返せ」なんて言ったらどうする？

Y：そりゃあもちろん！

私：そうよなあ。…自分ではようせんけど、取り押さえようって人が、この横の通路を通ったら、とりあえず足引く掛けるくらいはやるやろなあ。ハハハ、なんてネ。

Y：またあ、そんな冗談言って。M やったら…ハイジャックそのものを頑張ってくれるやんな。

そう言うYの目は笑っていなかった。多分、私も。

こんな危ない考えをグッと抑えて、日本に帰っては来たものの、案の定、私と相棒Y嬢は、帰国直後その名もズバリ『UBUD病』（極通 Vol.1 p.25 参照）を再発させてしまった。

かかり慣れた病気ではあるが、どうもこの春、社会人になってからかかったものは、症状がひどい。「仕事がある以上は、そう簡単にUBUDへは帰れん」という危機感が、病状を悪化させているのかもしれない。

鎮静剤として、その手の本や写真、音楽はもちろん、コピーやサンバル、クルブクなどの懐かしい味、大好きな Bapak Sana 家御用達の Dupa やガラム、使い慣れた Lux の白（日本では見つからなかった香り）などの BALI での生活の香り。…と、様々な感覚に効き目のあるアイテムを揃えてはいるのだが、仕事をしながら思わず「ううっ、BALIへ帰りたい」とか「なんで今、ここにおるんやろ？」などと考えてしまうことが多くなった。

職場の先輩に言わせれば、「“仕事ヤメたい”って言うじゃ引き止めようがあるけど、“バリへ帰ろう”じゃあなあ…。それ、病気やで」ということらしい。

確かに、雑誌等で“バリ”という文字を見つけて手の熱で雑誌がぐちゃっとなる位、食らい付いて読んじったり、交通事故で傷めた右足をかばいながらスアール・アグンの神戸公演へ行き、Bapak Suwentra やカズコさんに心配して頂いて、大丈夫じゃないのに「ティダアバアパですよ」なんて言ってしまうたり、バスやトラックの排気ガスを「ああ、ブリアタンみたい」と言っていとおしんじったり、買い物する時（特に夏物）の基準が「これBALIで重宝しそう」となって

しまったりするのは、誰がどう見ても病気だと思う。それもかなり重症の。でもそうさせちゃうだけの原因（病因）がBALIにはあるんだから仕方がない。

私はBALIが大好きだ。そして、BALIも私のことが好きだ（と、言い切ってしまう）。

そりゃあ、付き合いが長く、深くなればなるほどBALIのことが分からなくなるし、さっきまで笑い転げていたかと思うと、大判狂わせにあい、大泣きして先輩や友達を困らせることもある。

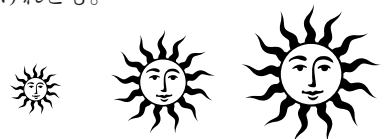
BALIは、決して私の思い通りにはならない。でも、そんなBALIが、私にはピッタリの居場所なんだと思う。だから、私にとってBALIは“行く”所ではなく“帰る”所なのだ。

『BALIへ帰ろう』病の特効薬は、この病気にかかった時から知っている。それはBALIへ住み着いちゃうこと。それも、親愛なる兄弟子 Bapak 伊藤のように「BALIが好きになってからは一度も日本に帰ってないので『BALIへ帰ろう』病の症状がもう一つははっきりしない」と、言える位になること。

でも、と、ここでチョット考える。果たして、今BALIへ帰ってしまってもいいのだろうか？と。

帰ればきつと、水を得た魚のように、鼻歌混じりで自転車にまたがり、あっちゃこっちゃで大暴れするんだろう。けれどもその生活には、どこか頭の隅っこで日本に帰る日を意識してなきやいけな、そんな脅迫感が伴う。私がしたいのは、そんな心配のない、もっとドカッと根を張った生活なのだ。そのためには、もうちょっと日本でお金を貯めながら、賢く歳をとる必要があると思う。そう、今の私はBALIでナニカをするには若すぎる気がする。

結局、私とYはもう少し日本にいることになりそうだ。Yは大阪でガムランを叩きながら「そういえば、デワさんのクンダン2年半もきいてないやん」と嘆き、私は「家族やねん」と Bapak Sana ファミリーの写真を持ち歩いて独りよがりしている辺りは、かなりヤバイ気もするんだけど。

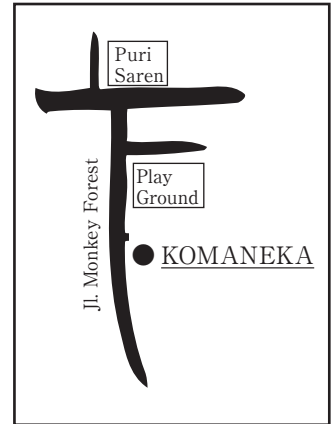


●今回は、新しく OPEN した、お洒落なギャラリーを二つ紹介します。

## Toko ◇ BEST 店

### KOMANEKA

UBUD の中心からジャラン・モンキー・フォレストに入り、サッカー場を通り過ぎ、しばらく行くと右手にカフェ・ワヤンがある。その手前左側に大きな前庭をもった一戸建の落ち着いた色調でモダンな建築のギャラリーが目に入る。ここが今回紹介するギャラリー、KOMANEKA である。バリ風建築のギャラリーが多い中、シックでお洒落な建物は街にもマッチしている。ゴテゴテとしたところがなく、外観からギャラリーのセンスがうかがい知ることができる。内部もやはりゆったりとした雰囲気があり、絵画も整然と飾られ、美術館の趣であり、見る側にとってはすばらしいギャラリーである。作品はバリの有名な画家の作品が多数集められている。絵の裏にドル表示で価格が書いてあるのが親切だ。

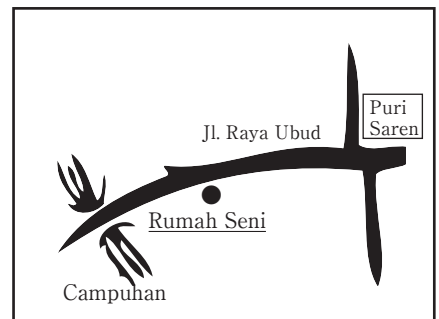


JL.MONKEY FOREST UBUD GIANYAR 80571 Tel:976090 Fax:977140

## Toko ◇ BEST 店

### RUMAH Seni

JL.RAYA UBUD をチャンプアンのに向かうと、両側が山を切り開いた崖になったところである。その崖の手前右側の階段を登るとプラ・ダラムである。左側に火葬場に向かう登り坂があるが、ギャラリーはその坂の手前である。二階建ての集合店舗の二階で営業しているのだが、一階の階段部分からユニークなディスプレイがしてあり、すぐに見つけることができる。一階の六店舗分がまるまるギャラリーになっているので広い。通りから見える二階のギャラリーの雰囲気からもユニークさを感じ取れる。そして、やはり中の作品もまたユニークである。一人の作家のギャラリーという感じで、その作家が集めたアンティークに囲まれて、バリをコラージュした作品や小物が飾られ、作家の趣味が満載といった感じ。見ていて楽しいギャラリーである。



GALLERY/ Jl. RAYA UBUD Depan Pura Dalam Tel.976319

WORK SHOP/ Jl. PEJANG SARI NO, 3 SANUR Tel&Fax.287547

Tokoko<sup>2</sup> Sayang  
+ 本店紹介



これ なあ〜んだ?

# Apa itu?

**問題**＝高さ10Mほど、まっすぐに立てられた電柱のような木の柱の上には、ムムム……? バケツにサンダル、サルンにブラジャーなどがぶらさがっています。インドネシア映画のシーンで見ただけには、斧や鎌など、かなり危険な物もぶらさがっていました。そして、ショート・パンツ姿の男たちがそれによじ登って……いったい何をしているのでしょうか?

**解答**＝これは、MEDANA DANA (ムダノ・ダノ) というレクリエーション・ゲームのひとつ。

毎年8月17日のインドネシア独立記念日には、各村で式典や催しものが開かれますが、これはそのひとつです。車やバイクのオイル(廃油)を表面に塗ったピンロウジュの木の幹の上にいろんな景品がぶらさがり、それをよじ登って取るという、早い者勝ちのゲームです。景品は上記のような、とりたてて高価なものでもありませんが、つるつるすべりながら、下の者の頭をふんずけながら、オイルで真っ黒になりながら、ゲームに参加する若者たちを見て大笑いする、というなんとも楽しいゲームなのです。



## 1997年の祭日のおしらせ

さてさて、今年ももう師走。あっ、この本が皆さんのお手元に届くのはもしかしてもう New Year かしら…?! (ヒヤヒヤ) 今年も Bali 行きの計画をたてましょ。

- |       |  |
|-------|--|
| 2月19日 | ガルンガン                                  |
| 3月1日  | クニンガン                                  |
| 3月14日 | ニツのオトナン ←プライベートでスミマセーン! ラワール食べに来て下さあい。 |
| 4月9日  | ニュピ                                    |
| 7月5日  | サラスワティ                                 |
| 9月17日 | ガルンガン                                  |
| 9月27日 | クニンガン                                  |



Illust:Fumio

# その他のニュース

## ■ウォルター・シュピース・フェスティバル 1996 開催！！

昨年(1995)はレゴン・フェスティバルが行なわれ好評でした。今年は10月26日から11月1日までの六日間ワヤン・フェスティバルが催されました。ちなみに、人の名前のワヤン(WAYAN)ではなく、ワヤン(WAYANG)クリッのワヤンのことです。新旧十二種類のワヤンが、連夜上演されワヤン・ファンには夢ここの毎日のようでした。内容は次の通りです。

- 10月26日(S.T.S.I, DENPASAR)  
WAYANG GOLEK GEDE BALI, 棒で大きな人形を操るワヤンの新作(S・T・S・I, 卒業制作)
- 10月27日(PURI LUKISAN, UBUD)  
WAYANG TANTRI, 動物をモチーフにして物語が演じられる。  
WAYANG PARWA, マハーバラタ物語を題材に演じる。
- 10月28日(BALAI BANJAR PENGOSSEKAN, UBUD)  
WAYANG LISTRIK, 外国人の考案によるスポット・ライトを使った創作ワヤン。踊り手も登場する。  
WAYANG CALONARANG, 魔女ランダのエルランガ王国に対抗する戦いの物語。
- 10月29日(TAMAN BUDAYA ART CENTRE, DENPASAR)  
WAYANG ARJA, アルジャの踊り手でもある女性のダラン(人形使い)による試作。  
WAYANG RAMAYANA, ダランはブンゴセカン村のワヤン・トゥンジュン(S・T・S・I生)。
- 10月30日(ARMA, UBUD)  
WAYANG GAMBUI, ■もある竹笛を中心にしたガンプー・ガムランの伴奏による14世紀の舞踊劇をワヤンで表現。  
WAYANG SASAK, ロンボク島オリジナルのワヤンであるが、カランガッサムではポピュラーに上演されている。ダランはササク語で語る。
- 10月31日(S.T.S.I, DENPASAR)  
WAYANG BABAD, バリ王家の歴史から題材を取った物語。  
WAYANG JAWA, 中部ジャワのワヤン。
- 11月1日(S.T.S.I, DENPASAR)

WAYANG CUPAK, CUPAK と GERANTANG の兄弟の誓いについての物語。  
以上、見ごたえのあるワヤン・フェスティバルでした。



## ■メリー・クリスマス！！

この標識はブドゥグルの近くで見つけたものです。「トナカイの通り道です、注意してください」。どう見てもこの絵はトナカイ。クリスマスにはサンタクロースを乗せたトナカイのソリが通り過ぎるのでしょうか。アイルランドでは「精霊の通り道」というお洒落な標識があるほどだから、バリにだってこんな標識があっても不思議はないでしょう。そうじゃなければ、ラーマヤナにでてくる可愛いキジャン(山羊)が踊りながらでてくるのだろうか。

いずれにしても自然だな～。



## ■イ・マデ・ルバ氏死去！！

「I MADE LEBAH / イ・マデ・ルバ氏。プリアタン村、バンジャール・カラに1910年頃生まれる。15～6歳からグンカの右腕として、グヌン・サリ楽団の設立に参加。以後、今日に至まで同楽団を率いてきた。クンダンの名手。」

— パルコ出版「踊る島バリ」より抜粋 —

# うぶっな人々 その17 ほりり

現在、グヌン・サリのグループでクンダンを演奏し、かつ、数々のガムランの名曲の作曲家としても知られる、イ・ワヤン・ガンドラ氏のお父さんでもあります。そのルバ氏が去る11月18日、お亡くなりになりました。プリアタンで、マンダラのグンカとともに、芸能の基盤を築いた人です。

「男だって、田んぼ仕事を終えたら、ラジャ（王さま）のところへ行って演奏する・・・そのくらいしかすることはなかったからなあ。今は練習といっても、忙しくて曲を覚えるのが精一杯なんだよ。昔のように熟するまで練習というわけにはいかんなあ」

－「踊る島バリ」より

昔のバリのよき時代に生きた、クンダンの名手のご冥福を心より祈りたいと思います。

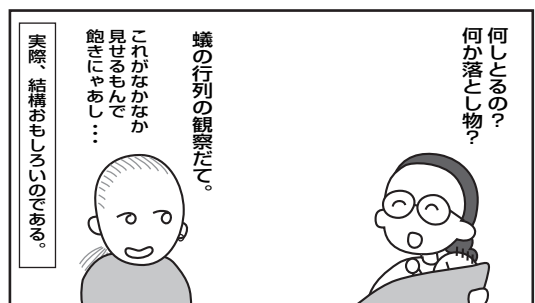
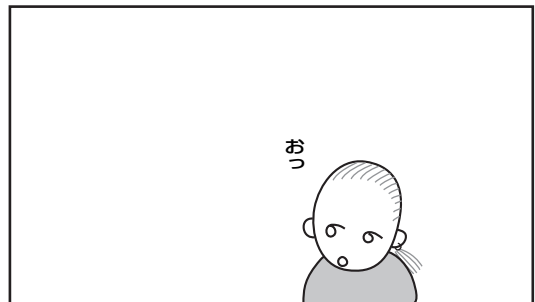
極通  
UBUD本部より あいび

日本のみなさま、

Selamat tahun baru!!

今年もみんなが、世界中の人々が、  
この世の森羅万象、宇宙全体が、  
平和で、幸せでありますように!!

とこ3で、'96年度版のこの極楽通信、  
まだ5冊めVol.17なのに、早々に  
'97にずいぶんしてしまいました。1つこう  
がんばったつもりで、オセオセでイケルか  
な...?と 思っていたのですが...トホホ。  
スマセン。ちゃんとVol.18まで 皆さんの  
お元にお届けする事を お約束します。  
① 早い なるべく早く '97年度版を  
続けたいと思っています。エナちゃんを  
復帰にむけて 食欲エリエリ!!  
'97年度版も、UBUDの愛をい〜っほい  
つめこんで、楽しい内容にしよう、  
スタッフ一同 気合いを入れます。  
どうぞ よろしく!! 早い 遅いごまかせない!!



## 【年間購読申込み方法】

エメールアドレス、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おりにかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。



# われらがEllieちゃん、ソロデビュー!!

UBUDが、BALIが大好きなEllieちゃんにとっても



ヌードも披露しちゃった Ellieちゃん。このアルバムには、彼女の、  
SweetなSweetな魅力がいっぱいつまります。そして、もしかしたら  
UBUDのさわかやかな風やLOVEを、この中に……♡

すぐにはアルバムを出しませんが、雑誌のグラビアでセクシーパンチの

## アムゴムばん

Pengumuman

① SHARPのエンジニアさん! どこかにいませんか?

MODEL NO. GX-CD75X (BK)  
SERIAL NO. 10613315

Singaporeで購入のポータブルカセットCDプレイヤーがこぼれしま  
ました。デングサールの修理屋に6ヶ月もstayしたのは、あげくに  
「ティダ ビサア〜」とつき返されしまいました。  
・CDが Errorでプレイ不能(修理屋ではレンズとリプレイしないとか、とか)  
・TAPE1がオートリバース機能、及びヘッドの部品のストックがインドネシアには  
ない(ジャカルタに問い合わせても、NO!! でした) 修理不可能なので  
・SHARPのエンジニアさん、Baliに遊びに来るついでに直して下さ〜い。  
(そんな都合よく直してもらえないのは承知ですが……)

アムゴムばん、アムゴムばん、アムゴムばん、アムゴムばん

影武者  
UBUD



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：堀田 剛一

極楽通信「UBUD」Vol. 17

1996年12月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha  
Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,  
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1996 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,  
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102  
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803